



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会運動論の観点から見るタイ-日における学生運動及び学生政治意識 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	KUCHAROENPHAIBUL, SIRINUD
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12518号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65747
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kucharoenphaibul_Sirinud_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： クーチャルーンパイブーン シリヌット

主査 教 授 櫻井 義秀

審査委員 副査 教 授 平澤 和司

副査 教 授 宮内 泰介

学位論文題名

社会運動論の観点から見るタイ・日における学生運動及び学生政治意識

本研究では、1970 年代前半に始まるタイの愛国的な日本製品不買運動と反軍事政権運動の実態を、タイの複数の日刊紙による記事の内容分析と、社会運動論的視点からイベント分析を行い、それに対応させて同時代の日本の政治運動や学生運動を分析した。その際、学生運動に参加した現在 70 歳前後の世代に、タイと日本においてインタビューを実施し、運動参加の動機や経緯、学生たちの社会階層とその後のライフコースを比較しながら、当時の学生運動とは何であったのかを回顧的に語ってもらうナラティブの分析も行った。

次に、タイ・日本共に 1980 年代から 2000 年代まで学生運動停滞の時代を迎えたが、2006 年のクーデター以降不安定化した政情において、ソーシャル・メディアを使って社会問題や環境問題への政治的提言を行う学生グループが登場した。これを日本の SHIELDS との対応において事例として比較分析し、同時に、日本の学生における政治的有効性感覚の調査と対をなす政治意識のアンケート調査をタイの複数の大学において実施し、日本・タイの学生政治意識と政治参加の方法の相違を考察したものである。

本論文の成果は次の三点にまとめられる。

第一に、1970 年代におけるタイの学生運動の主体と運動の領域・方法に関して、社会運動論の視角と新聞情報の内容分析に基づいて詳細な把握を行ったことである。従来、タイの学生運動にかかる研究では、タイ全国学生センター他、タンマサート大学の学生など民主化の主役と保守派の専門学校生の脇役だけで叙述されてきたが、少数学生グループや教員養成短期大学の学生などの運動が地方にも広がっていたことや、その背景として高等教育の拡大期に学歴間・学校間の就職機会や社会的認知の格差が広がり、学生の不満が顕在

化したという新知見を加えた。これは、日本の学生運動においても指摘されてきた共通点である。

第二に、現代のタイと日本における学生の政治意識を政治的有効性感覚の視点を生かして比較し、興味深い相違点を提示したことである。タイではこの十年ほど街頭の政治やクーデター等で選挙制度自体が揺らいでいるために、学生の外的有効性感覚が低いものの、まだ学生という選良意識と王族から直接卒業証書を手渡されるなどタイ独特のナショナリズムとの接合もあって、自己肯定感や内的有効性感覚が高い。それに対して日本の学生は、選挙権の行使に対して意識が低く、学生が何かできるという役割観や自己効力感も低いのである。こうした相違点を、調査票調査や各種データの比較から明らかにし、差異が生まれる社会的背景について説明し、政治教育や市民教育という観点から考察を加えた点は評価できる。

第三に、タイと日本の学生運動や政治意識にかかる論文や書籍を丁寧に読み込み、タイと日本の政治社会史、学生運動に関して周辺の領域含めて目配りしている点が挙げられる。言語の文法や音韻構造がまったく異なるタイの留学生在が、これほど日本語の文献を読みこなし、日本の学生運動経験者にインタビューを行い、達意の日本語で学術論文をまとめたこと自体も評価したい。

もっとも数点の改善すべき箇所がある。口述試験において研究内容を確認の上、主査・副査より、①多様な書き手による日本の学生運動論を資料とする場合に、書き手の政治的立場や運動経験を割り引いて資料化したり、書き手の見解を論評したりすべきであるが、この点にやや不足が見られる点、②学生運動の凋落と言い切るよりも、1960-70年代までの学生運動と2015年前後の学生たちの政治意識や活動をつなぐ考察にもう一工夫があつてよかったのではないかという点、および③日本とタイを比較する意義に関して、さらに踏み込んだ社会論や文化論を展開してもよかったのではないかという点、が課題として出された。これらの質問に対して申請者から現段階における論点の整理や課題にかかる見解が示され、申請者の問題理解が十分なされていることが了解された。

本申請論文の主な章が二本の査読誌に掲載されている点と、口述試験において申請者の研究テーマに関する理解が十分であると確認できたことから、本審査委員会は、本申請論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいという結論に達した。